

務していた保田扶佐子さんが同地へ留学、石版刷りの勉強をしていたので、フレーミングの碑を見たり、由緒ある病院の話を知りたりしていた。小川先生が病気で入院していられるのでその後どうだろうと二人で案じていた頃だった。先生の訃報は帰宅後初めて知り、十三日の葬儀に参列することが出来た。おごそかで盛大な葬儀であった。葬儀終了後何処かに大きな穴の空いたような、うつろな寂しさを抱きながら家路へと向った。

## 小川鼎三博士を悼む

富士川英郎

小川鼎三博士とはじめてお会いしたのは、昭和三十五年十一月、築地の西本願寺であった亡父の歿後二十周年記念の会においてであった。その会には三枝博音氏も来られ、私の従兄にあたる桐原葆見氏なども出席していたが、小川博士もそこで、それらの諸氏とともに立って、父についての短い話をされたのであった。

だが、私が小川博士と親しく接して、そのお話を直じかにいろいろ伺えるようになったのは、ここ十数年来、日本医史学会の例会にたびたび出席するようになってからのことである。昭和四十四年の春、東大を停年退職して、日本のドイツ文学界の前線から退いた私は、身辺に閑暇を得ることが多くなったのを幸いに、たびたび医史学会を訪れるようになった。それはかねてから「門前の小僧」というようなわけで、自分の研究というべきものは何もなかったが、日本の医学史に興味をもっていたからであるが、こうして私は医史学会の理事長をしておられた小川博士や、長老の緒方富雄、大島蘭三郎の二博士にもお目にかかる機会をしばしばもち、また、酒井シヅさんとも相識した。

そのうち私は、医史学会だけでなく、順天堂大学の医史学研究室にも、山崎文庫の書物を拝見かたがた、時おりお邪魔するようになったが、それはひとつには、小川博士の、あの周知の通りの、温雅で、たくまざるユーモアを湛えたお人柄に魅され、そのお話を聞くことが楽しかったからにはかならない。そして博士のお話を伺っているうちに、こちらもつりこまれて、つい長座をしてしまうことも時おりあった。一昨年秋であったか、或る日、研究室で博士と雑談を交わしていたとき、私が江戸時代の蘭学書生の間では、饅頭のことを「オストアンデル」、袴を「スワルトバートル」といったりするところが流行<sup>はや</sup>っていたと口をすべらすと、博士はそれを面白がって、その話を医史学会でせよと言われたには閉口した。

小川博士が私にしばしば語られたのは、博士が仙台で私の父と初対面されたときの話であった。昭和八年十月、父は仙台の東北大学医学部で「医史展覧会」を開き、また「東北医人伝」と題した講演をした。その講演を当時、東北大学医学部助教教授であった小川博士が聴かれ、かねて買い求めておられた父の『日本医学史綱要』を持参されて、父に署名を乞われたところ、父はその開巻第一枚に、「昭和八年十月十一日、著者富士川游、小川隼三君清鑒」と三行に分けて、墨書して、お渡ししたという。博士のお名前が普通の「鼎」ではなくて、古字と考えられていた「隼」という字で書かれていたので、博士はそれに感激されたとのことであるが、この話を博士は幾度か書いておられるし、私に向かっても、直<sup>じか</sup>に、たびたび語られたものであった。

小川博士は、日本医史学会の理事長をしておられたということもあつたのだろう、折にふれてよく私の父のことを書いたり、語ったりしておられた。これは遺族の者として深く感謝しているところであるが、殊に昭和五十年の夏、父の顕彰碑が二つ広島市に建ったときには、小川博士は酒井シヅさんとともに、八月の猛暑の日になわぎ東京から広島へ来られ、その除幕式で一場の祝辞を述べられた。また、その前年（昭和四十九年）に父の『日本医学史綱要』が平凡社の「東洋文庫」のうちに加えられ、上下二巻として再刊されたときにも、博士は親しくその校注の労をとられたうえに、詳しい

解説まで執筆された。それからこれは医史学会の会員の方々もあまり知っておられないことかと思うが、昭和五十三年三月に自由国民社から刊行された『明治・大正・昭和の名著・総解説』という本のなかでも、博士は父の『日本医学史』を紹介し、その詳しい解説を書いておられるのである。さらに『富士川游著作集』（思文閣出版）が昭和五十五年一月から刊行されたときも、そのきっかけを作ったのは小川博士と酒井さんであり、博士はその編集顧問として推薦の辞を書いて下さったり、いつもこの著作集のことを気にかけて、しばしば有益な助言を下さったりした。いま、これらのことを記しながら、あらためて博士の御霊前に厚い感謝を捧げたいという念を禁ずることができない。

小川博士は早くから医史学に興味をもっておられたようであるが、その研究を本格的にはじめられたのは、日本医史学会の理事長になられ、さらに順天堂大学の医史学教授に就任されたからのことであつたと思われる。これは博士の晩年の二十数年間に当るが、この間、博士が医史学の研究に人並はずれた熱意を以て没頭されたことは周知のところだろう。聞くところによれば、医史学の研究に専念されるようになってから、博士は嘗てその理事長をされていた解剖学会にはもはや一度も顔を出されなかつたということであるが、私には博士のその気持がなんだか分るような気がする。

小川博士の医史学に関する卓れた数多くの業績を語ることは、もとより私の任ではなく、また、その力もないが、博士の著書のうちでは名著『医学の歴史』をはじめとして、『解体新書』『前野良沢』などを、特に面白く読んだ。また、先年戴いた順天堂大学医学部医史学研究室の『開講二十周年記念業績目録』の巻末に附録として収められている博士の「生いたちの記」は、博士のあの魅力的な人柄をそこに彷彿として浮びあがらせているまことに興味津々たる回想記である。私は自分もその端くれのひとりであるせいも、洋の東西を問わず、学者の自叙伝を読むことに特別の興味をもっているが、小川博士の「生いたちの記」はそのうちでも卓れた、面白いものといふことができるだろう。だが、それはとにかくとして、小川博士の医史学に関する多くの著書を読んで強く感じられることは、博士がその該博な学識のほかに、卓れた人文科学的センスを豊かに持つておられるということである。このことが博士をあのような独特の卓れた医史学者にした

のではなからうか。

## 小川鼎三先生とキューバの勲章

古川 明

かねて小川鼎三先生の御病氣のことは知っていたが、あんなに早くおなくなりになるとは思わなかった。私は先生が日本医史学会の理事長に就任されたころ、医史学会に入会したので、そのときからずっと先生の御指導を受けることができた。先生は一見華奢にみえたが、ヒマラヤの検険隊長もなさったり、巨大な鯨の解剖もなさり、御丈夫だったので、もっと長生きして頂きたかったのに、病魔に侵されたのは、かえすがえすも残念なことだった。

先生は几帳面で、且つ非常な勉強家だったので、私が順天堂大学の医史学研究室を訪れたときは、いつも窓ぎわの机に向かって、著述か読書をしておられた。先生の名著「医学の歴史」(中公新書)は昭和三十九年刊行され、簡明で教科書的であり、とくに巻末の医学史略年表は、私にとって利用価値が大きいので、参考書として刊行直後から常用している。

いまから約十五年も前になるが、第七十回の日本文史学会総会(昭和四十四年)で、私がキューバの医学切手を中心に、痘瘡の歴史について報告したとき、小川先生が座長を務めて下さった。私の報告を終ったあと、先生はずっと前に、キューバの勲章を受けたことを、簡単に追加して下さいました。日本の医学者で、キューバの勲章を受けたのは、おそらく先生一人だけだろうと、そのとき私は大変驚いた。

受章の経緯のちにわかったが、先生が一九五四年、第十四回国際医史学会総会(ローマ)に出席されたとき、キュー